

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 23 日現在

機関番号：42718

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530884

研究課題名(和文) 通文化的視点からみる前言語期のコミュニケーション発達

研究課題名(英文) The development of Communication between Preverbal Infants and their Parents across Cultures

研究代表者

岡本 依子 (Okamoto, Yoriko)

湘北短期大学・その他部局等・准教授

研究者番号：00315730

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円、(間接経費) 990,000円

研究成果の概要(和文)：まだ話をしない乳児とのコミュニケーションがどのように成り立ち、発達的に変化するかを検討するため、日本および米国の親子を対象に、親による子どもの代弁について検討した。代弁とは、乳児の感情や意図、行為を言語化することである。まず、日本の乳児と親とのやりとりを分析し、代弁の機能について検討した。その結果、親が用いる代弁には、子どもの促進や言語化だけでなく、親のためにも用いられていることがわかった。また、米国の親子の代弁についても検討した結果、米国の親も子どもの代弁を用い類似する機能を持ちうるが、日本では代弁を用いる状況であっても国では用いられないなど相違がみられる場面も見いだした。

研究成果の概要(英文)：How can parents communicate with preverbal infants? Infants and parents make asymmetric contributions to their communication. This study focused on Parental Proxy Talk (PPT), which is that the parent verbalizes as if their non-verbal infant feels and thinks it. First, longitudinal data from Japanese families was analyzed on functions of PPT. The result showed 12 functional categories like Promotion of Infant's Act and Intention, Understanding the Situation, and so on. PPT can work for infants as well as for parents. Second, data from American families and Japanese ones were compared. It showed American parents use PPTs for their infants and both PPTs have similar functions. It, however, found some typical situations that showed dissimilarities, for example, an achievement situation. Japanese parents tried to share the infant's achievement as if it was parent's one using PPT. American parents avoided using PPT since they could respect the infant's own achievement.

研究分野：06

科研費の分科・細目：3902

キーワード：代弁 前言語期 親子コミュニケーション 文化

1. 研究開始当初の背景

本研究は、前言語期の親子コミュニケーションに関する調査であり、縦断的な観察研究である。これまで国内縦断調査(平成12-13年度,14-16年度,および,17-19年度の科学研究費補助金)の援助を得て,日本国内の親子40組の観察データ,および,それを補足するためのインタビューや育児日記などのデータを収集した。また,米国での調査(自己資金)では,2件の親子について,国内調査と同じ手法で開始していたが(つまり,協力家庭が確保された状態),継続の可否が危ぶまれていた。今回科学研究費補助金を得て,米国での調査の継続が可能となった。また,米国での調査については,研究協力者として旧米国クラーク大学/元デンマーク・オーズロー大学のJaan Valsiner教授の協力を得え,共同で実施計画を立て,クラーク大学のIRBの許可を得た。

2. 研究の目的

本研究は,乳児が育つ場を多層的に捉え,縦断的発達の観点および通文化的比較の観点から,親子のコミュニケーションについて検討することを目的とする。これは,乳児の発達を単なる個体能力の上昇的増大と捉えるのではなく,発達を文化的コミュニティへの参入のプロセス(Rogoff,2003)として捉え直そうとするものである。子どもは,ある地域,ある家庭,ある歴史的な時間軸上に生まれ落ち,そのコミュニティにすでに慣れ親んでいる大人や年長者(親など)によって導かれ,そのコミュニティへの参入を果たす。このプロセスは,子どもがコミュニティで受動的に文化を内化することを意味するのではなく,ことばなど文化的道具を使いこなし,それぞれ固有の対話的自己(Hermans & Hermans-Jansen, 2003)を生成するプロセスと考えられる。また同時に,そのような文

化的道具を身につけることで,既存の文化を新しく改変していく可能性を得るプロセスをも含意する。

これは同時に,親自身の発達,すなわち親への移行と相補的に並行するプロセスでもある。親ははじめから親だったわけではなく,子育て実践の試行錯誤を蓄積しながら,親として発達する。とくに,乳児とのコミュニケーションについては,まだ話をしない乳児とやりとりを成り立たせるという意味で,大人同士のコミュニケーションとは異なるやりかたを模索することになる。子育てを実践し始めたばかりの親にとって,コミュニケーションが仮にでも成り立つことは,自身の子育てを意味づけることになり,したがって,前言語期のコミュニケーションについて研究することは,親への移行という観点からも重要な意味を持つといえるだろう。

そもそも前言語期の乳児と親とのコミュニケーションは,非対称な関係(Adamson, Bakeman, Smith, & Waltersl., 1987)のうに成り立っているといえる。親は,まだ話をしない乳児を相手にどのようにコミュニケーションしているのだろうか。このような視点で親子のやりとりを見直すと,親が乳児に対して,親の視点から話しかけるだけでなく,まるで乳児が何か言っているような発話,すなわち乳児の視点からの代弁をしていることがわかる。代弁とは,たとえば,ごはんを食べている乳児に「おいしいねえ」と言ったり,おむつ替えをしながら「ああ,さっぱりした」と言ったりするように,乳児の考えや感情をおとなが言語化することである。このとき,同じ「おいしい」という発話内容であっても,親の視点からの発話として「おいしい?」や「おいしいでしょう」と確認することもできれば,乳児の視点から「ああ,おいしい!」と言ったり,乳児と親自身の両方(つまり“私たち”という)の視点から「おいしいねえ」と言ったりすることもできる。本研究では,

発話形式として、乳児の視点を含むものを代弁とする。岡本(2001)は、前言語期の乳児とやりとりにおける親の発話に着目し、それぞれの発話の形式として、誰を発話主体とした発話であったかという視点で分析を試みた。その結果、親の発話は、親の視点からの発話(非代弁)と子どもの視点からの発話(代弁)という二分法ではなく、子どもの視点を含む代弁には、子ども(のみ)の視点からの発話(子ども視点型代弁)、親子の視点からの発話(親子視点型代弁)、どちらの視点かあいまいな発話(あいまい型代弁)、および、発話の途中で発話主体が親から子へ、あるいは子から親へ移行する発話(移行型代弁)の4つのタイプの代弁があることを見いだした。また、岡本(2008)では、親子12組の量的な変化について、(1)代弁が漸増する時期(0~3ヶ月)、(2)代弁がピークに達する時期(6~9ヶ月)、および、(3)代弁が減退する時期(12~15ヶ月)の3つの時期が見いだされた。

本研究では、代弁の発話形式の側面だけでなく、機能的な側面にも着目する。研究1では、日本国内のデータをさらに分析し、代弁がどのような機能をもち、その機能が発達的にどのように変遷するかを親の視点から検討する。研究2では、文化的背景にアプローチするため、米国親子のコミュニケーション場面における代弁についても検討する。その際、国内データからの知見をもとに、比較可能な場面を抽出して質的に分析する。

3. 研究の方法

【研究1】国内縦断調査における親が用いる代弁の機能の変遷

協力者は、妊娠期からの縦

断研究プロジェクトに参加した東京近郊に在住する母子4組。誕生後0, 3, 6, 9, および、15ヶ月までの観察データを対象とする。対象児は全員第一子で男児2名、女児2名であった。観察は、15~20分間で、普段通りに親子で遊んでもらうよう教示し、大きな音で分析に影響がでるおもちゃ以外はおもちゃの規制は行わなかった。全行程は、親の承諾を得てビデオで録画撮影した。

分析にあたっては、録画された観察場面について、親子の発話および発声、状況について文字化した。聞き取り可能だったすべての母親の発話にID番号をふり、それぞれの観察場面において、観察開始から50発話を分析の対象とした。これら母親の発話について、誰の視点から発話されたものか、誰を発話主体とする発話形式を持つかという視点から、代弁を特定する。ここでは、岡本(2001;2008)にもとづき、4タイプの代弁および非代弁についてコーディングを行った。具体的なカテゴリーは、(1)子ども視点型代弁、(2)親子視点型代弁、(3)あいまい型代弁、(4)移行型代弁、および、(5)非代弁である(Table 1参照)。コーディングは第一著者と第三著者が事前にカテゴリーの定義についてよく話し合っ

Table 1. 4つのタイプの代弁と非代弁についての定義

カテゴリー	定義
代弁	子ども視点型代弁 子どもを発話主体として、子どもの視点から発話された親による代弁。
親子視点型代弁	親子を"私たち"として、"私たち"を発話主体とし、親子の視点から発話された親による代弁。「~ねえ」など、親
あいまい型代弁	子どもや親子を発話主体として発話されたのか、親の発話として発話されたのかあいまいな発話。代弁か非代弁かあいまいな発話。
移行型代弁	発話主体が子どもから親へ、あるいは、親から子どもへと発話内で移行する発話。「~って」「~は？」などの語尾が用いられることも。
非代弁	子どもの視点を含まない親の発話。おもちゃや第三者の代弁も。

た後、別々に分担して行った。二者の一致率は、全データの10%について検討し、5カテゴリーの一致が.90、代弁-非代弁の一致が.92であった。

まず、発話形式で定義された代弁が親子のやりとりの場に対してどのような機能のレパートリーがありうるのかを探るため、エピソード解釈にもとづく質的分析を行った。その際、文脈を考慮に入れるため、複数の発話を含むひと続きの発話行為をエピソードとして分析することとした。代弁エピソードには、発話や文脈だけでなく、かならず解釈した代弁の機能を付した。そのうえで、文脈や発話形式の類似性ではなく、代弁の機能についての類似性をもとにKJ法(川喜多,1967)を行った。つぎに、代弁が用いられない場面、すなわち、非代弁エピソードについて、なぜ代弁が用いられなかったか、代弁を用いることができたかという視点で検討を行った。そのうえで、代弁エピソードと非代弁エピソードを時系列に並べ、代弁の機能がどのように発達するかについて考察した。

【研究2】代弁の日米事例の比較

協力者は、米国・マサチューセッツ州に住する母子2組。国内データと比較するため、誕生後0,3,6,9,および、15ヶ月に家庭を訪問し、観察を行った(ただし1組においては生後0ヶ月の訪問はできなかった)。対象児はいずれも第一子で男児1名、女児1名であった。観察は15~20分間で、普段通りに親子で遊んでもらうよう教示し、大きな音で分析に影響がでるおもちゃ以外はおもちゃの規制は行わなかった。全行程は、親の承諾を得てビデオで録画撮影した。

分析にあたっては、録画された観察場面について、親子の発話および発声、状況について、英語ネイティブによる文字化を依頼した。ケース数が少ないため、数量的な分析は避け、研究1で見いだされた代弁エピソードに類似

したエピソードを、米国の親子のやりとりから抽出し、質的に分析した。

4. 研究成果

【研究1】国内縦断調査における親が用いる代弁の機能の変遷

代弁エピソードについて、質的な側面から代弁の機能についての分析を試みた。4組の親子の0,3,6,9,12,および15ヶ月時点でのやりとりから抽出した代弁エピソードは62あった。これらすべてのエピソードには、機能に関する記述が付されているので、62の機能についての記述を得たことになる。この機能に着目して、KJ法を用いた。その結果、代弁の機能に関する12のカテゴリーにまとめ、さらに上位の4カテゴリーにまとめた(Table 2)。また、この代弁の上位4カテゴリーは、大きくふたつの側面で整理できる。ひとつめは、上位カテゴリーの「子どもに合わせた代弁」と「子どもを方向付ける代弁」である。これらのカテゴリーに属する代弁は、乳児の現在または親の希望的未来の行為や思考の言語化ということができ、その意味で、これらの代弁は「子どものための代弁」といえるだろう。ふたつめの「状況へのはたらきかけとしての代弁」と「親の解釈補助としての代弁」は、親が乳児の意図のわからなさや予測の難しさをかかえた状況が典型的であり、親の情緒調整のため解釈を声に出したり、親の情緒調整のための時間を埋めたりする様子がかがえる。これらの代弁は、「親のための代弁」といえ、乳児の声を語る代弁であったとしても、乳児の意図や感情に忠実というわけではなく、親のためにも代弁が用いられていることが見いだされた。

非代弁エピソードについては、「未代弁」、「返答」、「代弁の非音声化」、「おもちゃの代弁」、および、「親の発話の代弁」にまとめられた。

Table 2. 親子コミュニケーション場面における代弁の機能

子どもに合わせた代弁	促進	子の現行行為を長く維持, さらに促進するための代弁	子どものための代弁 子どもの現在または希望未来の行為や思考の言語化。
	子の半意図の促進	子どもの意図は明確ではないが, 状況なども加味して, 母親が解釈した意図を促進するための代弁	
	子の明確な意図の代弁	身振りや親に明確に向けられた発声を伴い, 子の意図が明確な状況で, それをただ言語化する受動的代弁	
子どもを方向付ける代弁	子から観察者誘導	第三者へと子どもの世界を広げていくもの 子どものネガティブな状態に対して正反対の発話を意味づけることで誘導しようとする試み。	親のための代弁 親の情緒調整のための解釈であり, 情緒調整を含んだ間を持たせるための代弁
	消極的方向付け	子どもの様子を見つつ活動を切り替えようとする代弁。re-focus(逸れそうな注意を引き戻す)のための代弁を含む。	
	場面依存の語彙化	このような場面ではこうすべき, こう言うべきという内容が割り当てられる。食事場面で「おいしい」, ごっこ遊びで「いってきます」	
状況へのはたらきかけとしての代弁	時間埋め	間を維持。実況中継的。子の世話中などで子に集中できないが, 子どもの状況を維持する必要があるときの代弁	親のための代弁 親の情緒調整のための解釈であり, 情緒調整を含んだ間を持たせるための代弁
	親の内的状態の共有要	親の内的状態を代弁。代弁場面だが親が顕在化する。	
	緊急	緊急時に間を維持。子を退屈させないための代弁	
親の解釈補助としての代弁	親自身の場の認識化	打開策模索・状況の受け入れのため, 状況を代弁としていったん言語化	
	観察者への弁解	子どもの状況について観察者に対して言い訳や弁解をしているような代弁	

さらに, これらの代弁の機能を発達軸上で整理すると, (1)代弁漸増期(0~3ヶ月);「消極的方向付け」, 「親自身の場の認識化」および「時間埋め」に特徴が見られ, 親子のやりとりを試行錯誤するために代弁が用いられる時期, (2)代弁ピーク期(6~9ヶ月);「促進」や「子の半意図の促進」などのエピソードがみられ, 代弁の本来の意味である代弁が子どもの意図の発達に応じて限られた機能で用いられるようになる時期, および, (3)代弁減退期(12~15ヶ月);親子のやりとりが維持されていれば代弁が減少し, 「緊急」など特化された場面と機能で代弁が用いられる時期となった。

や」といった主語を日本語以上に明確に用いるため, 全体として代弁の例は少ない。しかし, 例1のように, 日米で用い方について類似している場面が見いだされた。子ども自身と子どもが視線を向けているものに, 親が視線を向け, その対象について, 「あれはなに?」と子どもの疑問の言語化とも, 親から子どもへの質問とも取れるようなあいまい型の代弁が見られた。他にも, 乳児のハイハイを促進する「速いでしょ(I'm so fast. So fast.)」という子ども視点型代弁や, 乳児の機嫌の悪さを紛らわすように「さあ行こう(Here we go)」という方向付けの機能をもつ親子視点型の代弁などが観察され, 日本において用いられる代弁との類似の例が見い

【研究2】代弁の日米事例の比較

米国の親子のやりとりにおいても, 代弁が見いだされた。英語圏では, you

例1) 3ヶ月女児と母親とのやりとり (乳児がビデオカメラを見入っている)	
What do you see over there?	非代弁
Hm?	非代弁
What do you see?	非代弁
What's that?	あいまい型代弁

だされた。一方,相違がみられた場面として,子どもが何かを達成した場面は特徴的であった。日本では「できた」など子ども視点型の代弁が見られることが多いが,米国では「できたね(You did it)」のように代弁が用いられず,主語に You を置く非代弁が用いられていた。子どもの達成を自分のことのように共感しようとする日本の親子のありようと,子どもの達成は子どものものとして尊重する米国の親子のありようが見いだされ,それぞれの文化的背景(たとえば,相互協同性 vs 相互独立性)が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下(川田)暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・須田治(2014) 親はどのように乳児とコミュニケーションするか: 前言語期の親子コミュニケーションにおける代弁の機能. 発達心理学研究, 25, 23-37.

6. 研究組織

(1)研究代表者

岡本 依子 (OKAMOTO, Yoriko)
湘北短期大学・保育学科・准教授
研究者番号: 00315730

(2)研究分担者

菅野 幸恵 (SUGANO, Yukie)
青山学院女子短期大学・子ども学科・准教授
研究者番号: 50317608